

『鳳城聯句集』訓注稿(四)

楊 昆 鵬

本稿は版本『鳳城聯句集』所収聯句作品について、試みに読み下しを施し注釈を付けたものである。前稿(本誌第三六号、平成二八年九月)の続きとして、全三十作のうち、第十一から第十五までの五点をここに掲載する。

【作者】(初出人名のみ)

(第十三)

義超 僧侶、越溪義超。

六条宰相 六条有広、公家。永禄七年(一五六四)生まれ、元和二年(一六一六)没、源氏。慶長十六年は四八歳。

(第十四)

日性 僧侶(日蓮)、天文二三年(一五五四)生まれ、慶長十

九年(一六一四)没、号は円智院、本地院。後陽成院に外典の講釈を行った。

(第十五)

通村 中院通村、公家。天正十五年(一五八七)生まれ、承応二年(一六五三)没。源氏、中院通勝の男。後陽成院及び後水尾院の和漢聯句会に多く参加した。

【凡例】

- ・五言の句冒頭に通し番号を付した。
- ・漢字の字体は原則として現在通行のものに統一した。
- ・訓点は底本のままにし、読み下しは原則として訓点に従うが、一部句意に基づき変更したものもある。なお、読み下しに適宜濁点を施した。
- ・明らかな誤字もそのまま翻刻し、期待される本文を右傍に(某カ)のように注記した。
- ・注は最小に止め、故事出典を示し、一部熟語の用例を示す。

真第十_(十一カ) 慶長十七年十月二十五日

1 葉_ハ、不_レ雨_ニ翔_ラ雨_ニ 葉は雨の翔らざるに雨ふる 雲

2 苔_ハ依_テ塵_ヲ起_シ塵_ニ 苔は塵の起ちたるに依りて塵る 竹

3 月寒_ク雲_ニ欲_ス凍_レ凍_レ 月寒くして雲凍んと欲す 宮

4 時 聖 里 於 仁 仁 時 聖 に し て 里 仁 に 於 て す 潤

5 履 薄 杳 栖 遑 閑 薄 き を 履 き て 杳 遑 閑 は し 召

6 帶 粧 濃 淡 新 粧 を 帯 び て 濃 淡 新 な り 圭

7 湖 枯 疑 失 鏡 湖 枯 れ て 鏡 を 失 ふ か と 疑 ふ 御

8 瀑 秀 覺 垂 紳 瀑 秀 で し 紳 を 垂 ら す か と 覺 ゆ 良

9 学 拾 廬 顔 笑 拾 を 学 び て 廬 顔 笑 む 重

10 仰 迦 竺 梵 伸 迦 を 仰 ぎ て 竺 梵 伸 ぶ 緒

(1) 雨が「翔」る用例は漢詩に見え、落葉を雨に喩えるのは例えは杜甫「桑柘葉如雨、飛蠶去裴回」(昔遊)などがある。

(2) 雲凍とは寒さで雲も凝固したように動かないさま。杜牧「臘雪一尺厚、雲凍寒頑癡」(雪中書懷)。

(3) 「於」は難読。ここでは「仁に於てす」と改めて読む。(4) せわしく落ち着かない様子。庾信「栖霞終不定、方欲浹沾袍」(和裴儀同秋日詩)。

(5) 唐代高僧の寒山拾得、普賢の化身とされる。(6) 迦葉、中国禅宗の始祖。

11 転 羊 牛 戲 蝶 羊 牛 を 転 ず る は 戲 蝶 竹

12 從 蛭 蟻 潛 謁 蛭 蟻 に 從 ふ は 潛 謁 雲

13 一 葦 凌 波 步 一 葦 凌 波 の 步 潤

14 長 松 掣 電 身 長 松 掣 電 の 身 宮

15 詩 仙 蘇 羽 化 詩 仙 蘇 羽 化 す 圭

16 金 友 杜 群 倫 金 友 杜 が 群 倫 召

17 毀 蒼 蚊 過 耳 毀 蒼 蚊 耳 を 過 ぐ 良

18 宮 商 鶯 弄 唇 宮 商 鶯 唇 を 弄 す 御

19 梅 和 風 笛 落 梅 は 風 笛 に 和 し て 落 つ 雲

20 莛 先 曉 籌 頻 莛 は 曉 籌 に 先 つ て 頻 な り 竹

(7) 蛭蟻は蛭やみみずの類、小人の喩え。賈誼「佞裝頼以隱処兮、夫豈從蝦与蛭蟻」(古文真宝・弔屈原賦)。謁は虫の意であり、「鱗」の誤りか。

(8) 葛洪「而洪之為人、信心而行、毀譽皆置於不聞」(抱樸子・自叙)、惠洪「君看功名事、真如過耳蚊」(次韻彦由見贈)。

(9) 莛は草の茎。曉籌は夜明けの時分。「以蠹測海、以莛撞

鐘〔漢書〕とあるように、ここは時刻を知らせる鐘を意識しているか。前句は笛の楽曲である「梅花落」を踏まえるが、月舟寿桂の「花邊花圍長樂宮、鐘声緩度月明中。寸筵扣落梅千点、人道高樓一笛風」(鐘声出花)において、梅の落花と筵とが詠まれ、注目される。

- 21 閑徹、僧房、島 閑徹は僧房の島 召
- 22 久要帝座、遵 久要は帝座の遵 御
- 23 釣台江靄隔 釣台 江靄隔つ 宮
- 24 文焰日居隣 文焰 日居隣る 重
- 25 鑿壁挑灯婢 壁を鑿ちて灯婢を挑む 澗
- 26 剋期驗蟬人 期を剋して蟬人を驗む 雲
- 27 甘蔗、果 甘蔗の果 御
- 28 補所補陀、莘 補所 補陀の莘 圭
- 29 村野促耕杏 村は野なり 耕すを促す杏 雲
- 30 郷遙寄思、蕁 郷は遙かにして思ふを寄る蕁 竹

(10) 『三体詩』張籍「僧房逢着款冬花、出寺吟行日已斜」(逢賈島)。

(11) 後漢の巖光。「巖光字子陵、一名遵、会稽余姚人也。少有高名、与光武同遊学。及光武即位、乃变名姓、隱身不見」。久要は旧友、帝座は光武帝を指す。

(12) 文章の光焰、文彩。孟郊「先生五岳遊、文焰藏金鼎」(訪嵩山道師不遇)。日居は「日居月諸」(詩經・邶風)など。

(13) 期限を設けること。『蒙求』「虞延剋期」「後漢虞延字子大、陳留東昏人；建武初、除細陽令。每至歲時伏臘、輒休遣徒繫婦家。並感恩德、応期而還」。

(14) 人名か、不明、後考に待つ。

(15) 補陀落山か。また「補陀莘」は未見。

- 31 迅雷誰戰鼓 迅雷は誰が戰鼓ぞ 重
- 32 徂歲彼奔輪 徂歲は彼の奔輪 澗
- 33 違定省、螭輩 定省に違ふは螭輩 召
- 34 序兄弟雁賓 兄弟を序づるは雁賓 御
- 35 赭湘羸殺景 湘を赭かにして羸殺景 雲
- 36 変魯孔知津 魯を変せば孔津を知る 澗
- 37 遊道德林、鳳 道德の林に遊ぶは鳳 御

38 臨^{リスル}行草^ハ楮^ニ哽 行草の楮に臨するは哽

澗

45 涼簾^ハ波波^ハ地 涼簾は波波地

涼簾は波波地

竹

39 孤窓^ハ峰^ニ苦^ロ對^ス 孤窓 峰は苦ろに對す

圭

46 霞^ハ盃^ハ処^ハ春 霞盃は処処の春

霞盃は処処の春

雲

40 永^ハ夜^ハ且^ニ横^ニ陳^ニ 永夜 且までに横陳

宮

47 舌^ハ塵^{周^ハ般^ハ若} 舌塵 周の般若

舌塵 周の般若

御

(16) 光陰の流れ去ること。蘇軾「典衣作重陽、徂歲慘將寒」
(和陶貧士七首併序其五)。

48 睡^ハ漢^ハ就^ハ無^ハ食 睡漢 就の無食

睡漢 就の無食

澗

(17) 親や年長者への挨拶。黃庭堅「青衿廢詩書、白髮違定省」
(送李德素歸舒城)。

49 籠^ハ具^ハ半^ハ頭^ハ眼^ハ 籠は半頭の眼を具す

籠は半頭の眼を具す

澗

(18) 『史記・秦始皇本紀』「浮江、至湘山祠、逢大風、幾不得渡。上問博士曰、湘君何神、博士對曰、聞之、堯之女、舜之妻、而葬此。於是始皇大怒、使刑徒三千人皆伐湘山樹、赭其山」。

50 録^ハ頤^ハ五^ハ藏^ハ神^ハ 録は五藏の神を頤ふ

録は五藏の神を頤ふ

竹

(19) 『論語・微子』「長沮、桀溺耦而耕、孔子過之、使子路問津焉。長沮曰、夫執与者為誰。子路曰、為孔丘。曰、是魯孔丘与、曰、是也。曰、是知津矣」。

(20) 霜雪を司る女神。杜甫「青女霜楓重、黃牛峽水喧」
(東屯月夜)。ここは橋に霜が降ること。

霜雪を司る女神。杜甫「青女霜楓重、黃牛峽水喧」
(東屯月夜)。ここは橋に霜が降ること。

東

(21) 伝説上の古国名、『山海經・海外西經』「白民之國、在龍魚北、白身披髮」。

(22) 仏語。『大方廣總持寶光明經』「或有舌塵三昧中、能現大舌塵境界、如是上味普周遍、天上人間悉愕然」。唐の玄覺「若將妄語誑衆生、自招拔舌塵沙劫」
(永嘉証道歌)。

仏語。『大方廣總持寶光明經』「或有舌塵三昧中、能現大舌塵境界、如是上味普周遍、天上人間悉愕然」。唐の玄覺「若將妄語誑衆生、自招拔舌塵沙劫」
(永嘉証道歌)。

玄

(23) 仏語、瞌睡漢か。『景德伝灯録』「滿目覷不見、滿耳聽不聞、此兩處不省得便是瞌睡漢」。

(24) 仏語。『成唯識論本文抄』「古人積半頭已上之言、由失肉眼、後得天眼、半頭已上悉能照矚、名半頭眼。後有積云、肉天具有、名全有眼」。

仏語。『成唯識論本文抄』「古人積半頭已上之言、由失肉眼、後得天眼、半頭已上悉能照矚、名半頭眼。後有積云、肉天具有、名全有眼」。

云

41 先^ハ進^ハ橋^ニ青^ニ女^ニ 先橋に進むは青女

竹

42 懷^テ移^テ家^ヲ白^ニ民^ニ 懷ひて家を移すは白民

御

43 太^ハ平^ハ花^ハ固^ハ蒂^ヲ 太平 花は蒂を固す

澗

44 尊^ハ者^ハ竹^ハ添^ハ筠^ヲ 尊者 竹は筠を添ふ

召

(25) 五臟神、道教でいう体の臟器を守る神。白居易「睡適三

尸性、慵安五藏神」(感事)。

51 鶉鳴^ア山近^シ蜀^ニ 鶉鳴きて山は蜀に近し 御

52 鯨治^ア水初^ハ岷 鯨治めて水は初めは岷 雲

53 霧簇^ツ胸淵^フ潜^カ 霧簇がつて胸淵く潜る 召

54 世清^メ名細^カ論^ニ 世清くして名細やかに論ず 御

55 賢^シ賢^レ宜^ク顛^ル禄^ヲ 賢を賢せば宜しく禄を顛るべし 重

56 老^ト老^レ退^リ収^メ縉^ニ 老を老として退きて縉に収む 召

57 鷺^ハ旧磯^ノ残^シ雪 鷺は旧磯の残雪 雲

58 鷄^ハ司徒^ノ早^シ晨 鷄は司徒の早晨 御

59 慰^シ聴^テ通^ス忍^ミ語^ニ 聴を慰めて忍の語に通す 召

60 修^レ妙^ヲ敬^ス台^ニ純^ニ 妙を修めて台の純を敬す 潤

(26) 杜甫「釣艇収縉尽、昏鳥接翅帰」(復愁十二首其二)な
どは釣り糸を収めることをいうが、ここでは底本の訓点
に従えば釣り糸に収めることになる。

(1)。元稹「雪鷺遠近飛、渚牙淺深出」(遣春十首其四)。
(28) 忍は禅宗五祖弘忍和尚のことか。
(29) 不明、人名か、後考に待つ。

61 攘^ス斥^ス一^ハ溪^ノ説^ヲ 仏を攘斥するは溪説 圭

62 生^ニ冤^ス我^一宿^一因 我を生冤する宿因 竹

63 寸愁^ノ苗幾^ノ尺^ノ 寸愁 苗は幾尺にして 召

64 微^分莢^は三^句 微分 莢は三句 雲

65 方^ラ潔^ク非^レ堯^ノ許^一 潔を方らぶ 堯を非とする許 竹

66 重^ク刑^ヲ浮^ス桀^ヲ辛^ニ 刑を重くす 桀を浮ぎたる辛 潤

67 剗^ク胎^ヲ持^テ鵝^ヲ蚌^ニ 胎を剗く 鵝を持する蚌 雲

68 尽^ク態^ヲ掃^テ蛾^ヲ螻^ニ 態を尽くす 蛾を掃ふ螻 潤

69 柳^ハ奪^フ漸^ノ瀟^ノ洒^ヲ 柳は漸の瀟洒を奪ふ 召

70 蘭^ハ憐^ム涙^ヲ沈^ム淪^ヲ 蘭は涙の沈淪を憐れむ 雲

(30) 涙は曹溪、禅宗六代祖慧能を指す。前句の「台」を受け
て、「菩提本無樹、明鏡亦非台」の法偈に基づく。こゝ

で「攘斥」するというのは、不立文字の主張を指すか。

(31) 蘇軾「三句已過黃梅雨、万里初來舶越風」(舶越風、並引)。微分はわずかに見分ける。唐楊發「漸映沙汀白、微分渚葉紅」(与諸公池上待月)。

(32) 潔白さを比べる。孔稚珪「北山移文」に「度白雪以方潔、干青雲而直上」(古文真宝)とある。「許」は許由、堯の禪讓を嫌い潁水に遁れた。

(33) 商紂の号は帝辛、夏桀より残虐の暴君だという。

(34) 蛾と螻とは女性の美貌をいう。『詩經・衛風』「螻首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮」(碩人)。

71 懶 鷗 行吟 澤 懶鷗 行くゆく澤に吟ふ 澗

72 列 鵠 日朝 宸 列鵠 日びに宸に朝す 重

73 陵 宋風 韓雅 陵は宋風韓雅 御

74 況 楊疵 孟醇 況は楊疵孟醇 澗

75 茄 呼 諸子 長 茄は諸子の長と呼ぶ 竹

76 槐 結 簪尊 姻 槐は簪尊の姻を結ぶ 圭

77 夢 駭 鐘 遮 莫 夢は駭きて鐘 遮莫 重

78 勤 精 繁 稍 親 勤は精くして繁稍や親しむ 召

79 円 書生 蝥賊 円は書生の蝥賊 雲

80 龍 跛脚 鱗 龍は跛脚の鱗 竹

(35) 行列を成す群臣。官服に鵠の模様をあしらうことから。劉克莊「鵠袍肯在諸生列、虫篆原非壯士心」(答趙補同人)。類似の詩境は東第一 23句に既出。

(36) 陵は杜甫、宋之問と韓愈の詩風を兼ねることか。

(37) 況は荀況、楊は楊雄、孟は孟軻か。

(38) 箸は箸下、酒の意、簪尊は酒杯。一句は槐の樹陰で飲酒する楽しみをいうか。

(39) 蝥賊は苗を食う虫、及び良民を害する悪人。

(40) 鱗のように皸割れすること。

81 蕉 耄 紅旗 破 蕉は耄して紅旗破る 召

82 薜 埋 黃絹 泯 薜に埋れて黃絹泯す 重

83 較 涇 慙 智 淺 涇に較べて智の淺きを慙づ 雲

84 施 渥 受 恩 均 渥を施して恩の均しきを受く 圭

85 直 下 冠 猴 羽 直下 猴に冠する羽 御

86 奇 謀 羅 雀 巡 奇謀 雀に羅する巡 圭

87 乾陪徒綴^ル句^ヲ 乾陪 徒に句を綴る 澗

92 東海^ハ呂陽^ハ浜 東海は呂が陽浜 澗

88 謹瀆御詞^ヲ 謹瀆^{讀マシ} 御詞の瀆 澗

93 民^ハ布^ニ蛙^ノ声^ヲト^ト 民は蛙声のトを布く 雲

89 騷^ハ会^ニ多^ク重^シ蓋^ヲ 騷会 多くは蓋を重ね 御

94 祖^ハ伝^テ熊^ノ耳^ヲ胸^ニ 祖は熊耳の胸を伝ふ 召

90 共^ニ敬^ツ醉^レ後^ノ巾 共に敬つ酔後の巾 御

95 誑^レ人^ヲ舟^ニ隻^ト履 人を誑かして舟隻履 竹

(41) 白居易「紅旗破賊非吾事、黄紙除書無我名」(劉十四同宿)。次句の「黄絹」もこの詩句に基づく連想か。

96 勦^レ力^ヲ鼎^ニ千^ト鈞 力を勦すれば鼎千鈞 緒

(42) 黄絹は黄絹幼婦の略で曹娥碑のこと、あるいは「ここ」では単に苔に埋もれている石碑をいう。

97 天^ノ筆^ハ洪^ク無^シ難^ニ 天筆 洪は難み無し 御

(43) 牛溲、蹄溲、牛の蹄に溜まる雨水。『淮南子』「夫牛蹄之溲、不生鱸鮪」とあり、高誘注に「溲、雨水也、滿牛蹄迹中、言其小也」とある。羅隱「英雄已往時難問、苔蘚何知日漸深。還有市塵沾酒客、雀喧鳩聚話蹄溲」(題潤州妙善前石羊)。

98 舍^ノ黎^ト弗^レ有^リ嗔 舍黎弗 嗔り有り 澗

(44) 『史記・項羽本紀』「人或説項王曰「関中阻山河四塞、地肥饒、可都以霸」。項王見秦宮皆以燒殘破、又心懷思欲東帰、曰「富貴不帰故郷、如衣繡夜行、誰知之者」。説者曰「人言楚人沐猴而冠耳、果然」。

99 攬^テ空^ヲ形^ハ外^ニ桂 空を攬く外に形るゝ桂 重

(45) 『史記・汲鄭列伝』「初翟公為廷尉、賓客闐門。及廢、門外可設雀羅」。

100 祝^シ関^ヲ引^ル年^ヲ椿 関を祝す 年を引ぶる椿

(46) 陶潜「常言五月中、北窓下臥、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人」(与子儼等書)。

(47) 呂尚か、不明。

(48) 熊耳山の定林寺、達磨祖師が最後に伝法した場所。胸は屈胸、木綿製の布、達磨から伝わる袈裟がこの布を使用するとう。

(49) 達磨祖師の没後、「葬熊耳山、起塔於定林寺。後三歳、

91 北窓、陶^ハ刹^界 北窓は陶が刹界 宮

(49) 達磨祖師の没後、「葬熊耳山、起塔於定林寺。後三歳、

魏宋雲奉使西域回、遇祖於葱嶺、見乎携隻履、翩翩独逝。雲問、使何往。祖曰、西天去。(景德伝灯録)。ここは舟を履と喩える。

(50) 勦力、力を尽くすこと、力を合わせることに。

(51) 洪は葛洪か、多くの著述を難無く行ったこと。また「南昌故郡、洪都新府」で始まる『滕王閣序』を指し、王勃の天賦の文才を天筆というか。

文第十二 慶長十八年五月二十七日

1 清朝 無^{ト云}不^レ舜^{ナラ} 清朝 舜ならずと云ふこと無し

2 松^モ亦^モ奏^ス南^ノ薰^ヲ 松も亦た南薰を奏す 齡

3 昔^ト日^ハ為^シ遺^レ勃^ヲ 昔日 勃を遺すがために

4 英^ハ終^ニ降^ス北^ノ軍^ヲ 英は終に北軍を降す 勝

5 服^シ涼^ク林^ノ袒^ス袖^ヲ 涼を服して林は袖を袒ぐ 節

6 釣^ル澤^ニ闕^ク頒^シ纁^ヲ 澤に釣る闕は纁を頒つ 良

7 渚^ハ被^シ鷗^ノ星^ヲ照^ス 渚は鷗星に照らさる 宮

8 煙^ハ令^メ螺^ヲ甲^ヲ熏^フ 煙は螺甲をして熏せしむれ 御

9 甘^テ閑^ク多^ク口^ヲ谷^ヲ 閑を甘て多くは谷を口にす 召

10 約^メ夢^ニ謾^シ妻^ト禁^ム 夢に約して謾に禁に妻とする 雲

(1) 南風。『孔子家語』「昔者舜彈五絃之琴、造南風之詩」。王維「陌上堯樽傾北斗、樓前舜樂動南薰」(大同殿柱産玉芝龍池上有慶雲神光照殿有百官共睹聖恩便賜宴樂敢書即事)。

(2) 漢の大尉周勃。『史記・高祖本紀』「已而呂后問、陛下百歳後、蕭相国即死、令誰代之。上曰、(中略)陳平智有余、然難以独任、周勃重厚少文。然安劉氏者必勃也」。

(3) 北軍は漢代都城に駐屯する軍兵のうち、東北に位置する長樂宮を護衛するものを北軍、西南の未央宮の守備をするのを南軍という。呂后の死後、周勃が北軍を押さえ、諸呂の乱を収めた。『史記・呂后本紀』「太尉將之入軍門、行令軍中曰、為呂氏右禮、為劉氏左禮。軍中皆左禮、為劉氏。太尉行至。將軍呂祿亦解上將印去。太尉遂將北軍」。

(4) 纁は帝王が賢者隱士を招聘する際の贈る織物。ここは後漢の蔽光の場合をいう。『後漢書・逸民伝』「蔽光字子陵、一名遵、会稽余姚人也。少有高名、与光武同遊学。及光武即位、内变名姓隱身不見。帝思其賢、乃令以物色訪之。後齐国上言「有一男子披羊裘釣沢中。」帝疑其光、乃備安車玄纁、遣使聘之。三反而後至」。

(5) 黄庭堅「百煉香螺沈水、宝薰近出江南。一椀黄雲繞几、深禅想对同参」(有惠江南帳中香者戲答六言、其二)。雪

嶺「李主帳中螺甲煙、涪翁吟取有新篇。宝薰自入先生集、一燧黃雲五百年」(翰林五鳳集「読山谷帳中香」)。

(6) 淳于禁、唐代伝記「南柯太守伝」の主人公、夢の中で槐安国公主を娶った。『太平広記』に記され、『佩文韻府』淳于禁項などにもみえる。雪斐紹立「暫愛古槐情不他、緑陰深処夕陽多。暮鐘緩打西樓下、若有于禁如夢何」(雪斐詩集)。

11 槐舞随風娜ニワヤカナナリ 槐舞 風に随ひて娜なやかなり 重
12 栗留先臘ツテテ聞ク 栗留 臘ニに先つて聞く 竹
13 雪融疑ニ玉鑠キ 雪融して玉の鑠きゆるかと疑ふ 麿
14 雨細訝ニ糸紛ルカト 雨細にして糸の紛るゝかと訝ふ 緒
15 怨種蕉素ル 怨種 蕉を種うる素 勝
16 志占ナフ筮文 志占 筮を占ふ文 齡
17 雕籠ハ鵬麦里リ 彫籠ハは鵬の麦里リ 良
18 生書雁湘雲 生書 雁の湘雲 節
19 漁暇嘯歌水ニ 漁暇 水に嘯歌す 御

20 吾伊舒ニ卷ス墳ニ 吾伊ハ 墳ニに舒卷ス 宮

(7) 白鵬。元稹「有鳥有鳥謂白鵬、雪毛皓白紅嘴殷。貴人妾婦愛光彩、行提坐臂怡朱顏。妖姬謝寵辞金屋、彫籠又伴新人宿。無心為主擬銜花、空長白毛映紅肉」(有鳥二十章、第十三)。

(8) 讀書の声。黃庭堅「南窓讀書声吾伊、北窓見月歌竹枝」(考試局与孫元忠博士竹間对窓夜聞元忠誦書声調悲壯戲作竹枝歌三章和之、其一)。墳ニは墳籍、古代典籍のことか。

21 灯花春幾度ソ 灯花 春は幾度ぞ 雲
22 昏見路難シ分チ 昏見ハ 路は分かち難し 召
23 蜚草間翁仲 蜚ハは草間の翁仲ト 竹
24 鶴桃源隱君 鶴は桃源の隱君 麿
25 電飛碁忘ス夏ヲ 電飛びて碁夏を忘す 齡
26 郷香カニ杖還ル暈ニ 郷香かにして杖暈ルに還る 御
27 鐘步没ス蹤ニ跡ヲ 鐘步ハ 蹤跡を没す 節
28 壁談絶ス氣ヲ 壁談 氣ヲを絶ヤす 勝

29 茶^ハ 甌^ニ 雷^ヲ 駢^ス 睡^レ 茶甌 雷は睡を駢す 宮

30 藜^ハ 焰^ニ 閣^ヲ 精^シ 勤^ル 藜焰 閣は勤むるに精し 雲

(9) 夕暮時に見ること。漢詩には用例が少なく、『古文真宝』宋之問「明河篇」に「昏見南樓清且淺、曉落西山縱復橫」とみえる。

(10) 『魏書・明帝紀』景初元年の記述に『魏略』は「大発銅鑄作銅人二号曰翁仲、列坐於司馬門外」と注す。後に陵墓の前に立てられる石像をいう。陸遊「淒涼漢陵廟、衰草臥翁仲」（謁漢昭烈惠陵及諸葛公祠宇）は典型的な用例で、また柳宗元「伏波故道風煙在、翁仲遺墟草樹平」（衡陽与夢得分路贈別）のように翁仲は草むらに埋もれる情景が描かれる。黄庭堅「往者不可言、古柏守翁仲」（次韻吳宣義三徑懷友）もある。

(11) 鐘歩は不明、鐘の響を聞きながら歩むことか。

(12) 香氣氛氳の意か。「莊嚴其地燒衆妙香、香氣氛氳」（華嚴經）。「壁談」は用例が未見、壁に向かい禪を説くことか。

(13) 茶が煮立つ音で眠気を覚ますこと。黄庭堅「官饗同盤厭腥膩、茶甌破睡秋堂空」（戲答陳元興）。

(14) 青藜杖の火焰、劉向が天禄閣で古書を校録する際に仙人に会った故事。齊第八34句に既出。

31 詩^ハ 富^ス 意^中 景^ニ 詩は意中の景に富す 麋

32 祝^ハ 伸^ニ 寿^一 万^ノ 圻^一 祝は寿万の圻を伸ばす 竹

33 駕^メ 空^ニ 仙^ヲ 挿^ム 翼^ヲ 空に駕して仙は翼を挿む 節

34 忍^テ 凍^ヲ 士^ヲ 生^ス 戰^ヲ 凍を忍びて士は戦を生ず 良

35 嵐^ニ 霑^ス 湿^ス 樵^一 笛^ヲ 嵐霑 樵笛を湿す 御

36 江^ハ 波^ヲ 織^ル 簾^ニ 紋^ヲ 江波 簾紋を織る 宮

37 洗^テ 炎^ヲ 窓^ヲ 洗^ス 洗^レ 竹^ヲ 炎を洗ひて窓は竹を洗す 召

38 観^テ 色^ヲ 夕^ニ 観^ル 色^ヲ 色を観て夕は権を観ず 御

39 鷓^ハ 再^ヒ 越^ス 声^ヲ 鷓 鷓は再び越声の鷓 雲

40 鷓^ハ 沈^ム 吳^ノ 思^ノ 員^一 鷓は沈む吳思の員 齡

(15) 寿命の万年に及ぶほど長らえること。『儀礼・士冠礼』に成人を言祝ぐ祝詞として「眉寿万年、永受胡福」と記される。「眉寿」は『詩経・豳風』「為此春酒、以介眉寿」にみえる。

(16) 前句の仙人に対して、生活苦に強いられる土人を詠む。陸遊「手皸若龜兆、面槁無人色。士窮自其分、所幸全大節」（書逆旅壁）。

(17) 竹の小枝を削り落とすこと。陸遊「雨潤北窓看洗竹、霜

清南陌課剥桑（示兒子）、白居易「晴教晒葉泥茶灶、閑看科松洗竹林」（偶吟二首、其二）など。

- (18) 戦国時代越の人莊烏が病中に故郷の越を思い、越の発音を口にするという。『史記・張儀列伝』「越人莊烏仕楚執圭、有頃而病（中略）、凡人の思故、在其病也。彼思越則越声、不思越則楚声」。蘇轍「病憶故郷同越鳥、性安田野似神謔」（次韻王巩廷評招飲）。また蘇軾「珍禽声好猶思越、野橘香清未過淮」（泗州南山監倉蕭淵東軒二首、其二）も意識されたか。
- (19) 前句にある越の烏に対して、呉の員すなわち伍子胥のこと。『史記・伍子胥列伝』「呉王聞之大怒、乃取子胥尸盛以鴟夷革、浮之江中」。

- 41 破^レ蓑^ル 訛^ル 快^ク 眼^ヲ 破蓑 眼を扶るか⁽²⁰⁾と訛る 竹
- 42 健^ク 筆^ヲ 得^テ 分^ク 筋^ヲ 健筆 筋を分かつことを得たり 節
- 43 池^ニ 涸^テ 荷^ヲ 條^ヲ 素^ク 池涸れて荷條素る 良
- 44 霜^ニ 微^ニ 楓^ノ 半^ニ 醺^ス 霜微にして楓半ば醺す 御
- 45 自^ラ 珍^ナ リトス 擯^シ 錦^ヲ 軾^ヲ 自ら珍なりとす 錦を擯る軾⁽²¹⁾ 勝
- 46 独^ニ 潔^シ 捨^レ 財^ヲ 蘊^ヲ 独り潔し 財を捨つる蘊⁽²²⁾ 賡
- 47 百^ノ 詠^ヲ 選^ブ 梅^ノ 一^ヲ 仏^ヲ 百詠 梅仏を選ぶ⁽²³⁾ 雲

48 大^ニ 賢^ニ 比^ス 柏^ノ 群^ニ 大賢 柏群に比す 節

49 敵^ニ 乎^ニ 周^ノ 在^ル 魯^ニ 敵なるかな 周は魯に在り⁽²⁴⁾ 御

50 是^レ 孰^シ 蜀^ノ 同^シ 閩^ニ 是孰れ蜀は閩に同じ⁽²⁵⁾ 竹

(20) 目を扶るとは、伍子胥が呉王に自害を迫られ、「抉吾眼懸呉東門之上、以觀越寇之入滅呉也」（史記・伍子胥列伝）と述べたことを指す。

(21) 錦繡を陳べ広げること。班固「若擯錦布繡、燭耀乎其陂」（西都賦）、蘇軾に「雲山擯錦、朝露授授」（沁園春・赴密州早行馬上寄子由）の句がある。

(22) 曹希蘊、北宋の尼僧、蘇軾に詩を評価される（東坡題跋）。

(23) 梅の花。雪叟紹立の『雪叟詩集』に「梅花仏」と題して「雪中梅花独尊仏、香風吹起尽都盧」と詠む。また「梅仏出興劫外春、乾坤枝上現金身」も。百詠は方蒙仲の「和刘後村梅花百詠」を指すか。なお後村は劉克莊の号。

(24) 『左伝・閔公元年』「魯不棄周礼、未可動也」。

(25) 蜀と閩は氣候また習俗が似ることか。劉克莊「朝回暖律变嚴冬、応念閩風与蜀同」（次韻庾使左使中書行部二首、其一）。また『補注杜詩』卷九「閩水歌」について補註者黄鶴は「蓋閩蜀同風」と記す。宋人の認識か。

51 宦^ノ 道^ヲ 經^テ 危^ク 棧^ヲ 宦道 危棧を経 宮

52 旅程 隔^二旧粉^一 旅程 旧粉を隔つ 節

53 枕^ハ於^リ鵲^外蝶 枕は鵲外より蝶 齡

54 根^ハ就^テ驚^頭蚊 根は驚頭に就きて蚊 麿

55 布^レ髮^ヲ掩^レ泥^柳 髮を布きて泥を掩ふは柳 良

56 纂^ム言^ヲ釣^レ深^芸 言を纂むるに深きを釣るは芸 雲

57 破^一旬^排老^愈 破旬 老を排する愈 節

58 虚^一漢^遇雲^貴 虚漢 雲に遇ふ貴 雲

59 勇^一者^横戈^蟹 勇者 戈を横ふ蟹 御

60 杜^一多^藏夔^夔 杜多 夔に藏す夔 齡

(26) 高祖劉邦の出身地豊邑「粉榆社」から故郷の意、「粉榆」「郷粉」の用例が多い。『史記・封禪書』「高祖初起、禱豊粉榆社」。蘇軾「問君何時返郷粉、收拾散亡理放紛」(子由生日以檀香觀音像及新合印香銀篆繫為寿)。
(27) 仏教故事。「見然灯仏散五莖花、布髮掩泥開無上法」(大般若波羅蜜多經)。「世尊因地布髮掩泥、献花於然灯仏」(虚堂録犁耕)。唐貫休「代天理物映千古、布髮掩泥非

(28) 芸は「草也」(聚分韻略)、ここは「芸編」すなわち書籍の意か。

(29) 破旬は波旬に同じか。天魔波旬、修行を邪魔する。韓愈が仏法と道教を排斥した。

(30) 虚漢は掠虚漢の略か、虚名を盗む者。また高い天の川を指す可能性もある。「虚漢清月上、山空無四隣」(石門文字禪)。賁は人名、孟賁、戦国時代の勇士。

(31) 杜多、頭陀。ここは托鉢して修行する僧か。

61 宿^一胸^天幾^大 宿胸 天は幾ばくか大なる 竹

62 沙^一戲^座交^欣 沙戲 座は交ごも欣ぶ 宮

63 九^一徑^楊欺^亮 九徑 楊は亮を欺く 雲

64 十^一年^葛擬^股 十年 葛は股に擬す 勝

65 那^一僧^蛙咄^咄 那僧 蛙は咄咄 節

66 些^一子^狒閻^閻 些子 狒は閻閻 竹

67 泉^一曲^純如^也 泉曲 純如たり 御

68 午^一眠^郷去^云 午眠 郷を去らんと云ふ 良

99 終^テ西^ヲ收^ム金^ノ鑰^ヲ 西を終へて金鑰を収む

召 4 陰^ノ緑^ニ好^シ孤^リ存^{スルニ} 陰緑にして孤り存するに好し 義超

100 粧^テ晨^ニ著^シ繡^ノ裙^ヲ 晨に粧ひて繡裙を著す

節 5 方^フ潔^ク鷗^ノ前^ノ鷺 潔を方ぶ 鷗前の鷺 竹

(46) 前句の趙から汾水を連想。周伯琦「戦国東西分晋趙、中原南北带汾河」(過太行山)。截流は河を横切ること。孟浩然「截流寧借楫、掛席自生風」(和李侍御渡松滋江)。

汾水を渡ることは例えば蘇頌「北風吹白雲、万里渡河汾」(汾上驚秋)が著名。

(47) 底本の訓点は難読。ここでは「かぞふべし」と読み、魚の姿が明確にみえることと取る。

(48) 仏語。遮は阻止すること、犯は戒律を犯すこと。開遮持犯。

(49) 不明、後考を待つ。

(50) 不明、後考を待つ。

(51) 鍵。夕暮れ(酉)時分に鍵を収めること。

元第十三 慶長十六年十一月十三日

1 梅^ハ不^レ于^ニ春^ノ事^ニ 梅は春事にあらず

2 冬^ノ華^ハ是^レ聖^ノ恩^ニ 冬華くは是れ聖恩 寿洪

3 松^ハ雖^シ経^ト雪^ノ苦^ヲ 松は雪苦を経と雖も

4 陰^ノ緑^ニ好^シ孤^リ存^{スルニ} 陰緑にして孤り存するに好し

5 方^フ潔^ク鷗^ノ前^ノ鷺 潔を方ぶ 鷗前の鷺

6 遅^ク明^ク鵠^ノ立^{スル}鶺鴒 遅明 鵠立する鶺鴒 圭

7 鐘^ハ從^テ風^ノ瘦^ク遠^シ 鐘は風瘦てより遠し 良

8 枕^ハ奈^シ市^ノ声^ノ喧^ヲ 枕は市声の喧を奈ん 御

9 片^ハ雲^ノ柳^ノ輕^ク裊^ム 片雲 柳は軽く裊む 雲

10 幽^ノ蹊^ノ草^ノ甚^ク蕃^シ 幽蹊 草は甚だ蕃し 節

(1) 潔さを比ぶ。「蕭灑出塵之想。度白雪以方潔」(古文真宝・北山遺文)。

(2) 底本の訓点は難読。遅明は黎明、張九齡「遅明申藻薦、先夕旅岩扉」(洪州西山祈雨是日輒応因賦詩言事)。また鵠立は直立すること。蘇軾「侍臣鵠立通明殿、一朵紅雲捧玉皇」(上元侍飲樓上三首呈同列、其一)。

(3) 風が瘦せる表現は珍しく、宋詩に白玉蟾「雨肥碧澗落花水、風瘦青松啼鳥枝」(首夏)が見える程度か。

(4) 中国漢詩また五山の漢詩に用例がほとんど見出されず、宋元口語か。一方、『城西聯句』に「片雲漏卮楚、深秋落木瀟」、「片雲塔啞咽、微颺檐馬鳴」と複数もみえ、ま

た和漢聯句でも例えば弘治二年（一五五六）和漢千句第
四百韻に「91暫焉采片雲（江心）、92遙者望前巒（蒼）」
とある。特定の作者によって聯句から和漢聯句へ、また
本作にも做われ受容されたと考えられる。

- 11 倦^レ行^ニ 忘^ル就^ス熟^ニ 行くに倦みて熟に就くことを忘す 潤
- 12 安^メ睡^リ耐^レ締^ニ婚^ヲ 睡を安んじて婚を締るに耐へたり 重
- 13 築^テ壤^ヲ蟻^ヲ卑^シ泰^ヲ 壤を築きて蟻は泰を卑しとす 超
- 14 望^テ塵^ヲ蠅^ヲ附^ク宛^ニ 塵を望みて蠅は宛に附く 洪
- 15 樓^ハ鍾^ニ千里^ノ勝^ヲ 樓は千里の勝を鍾む 圭
- 16 炉^ハ帯^ニ一^ノ陽^ノ暄^ヲ 炉は一陽の暄を帯ぶ 竹
- 17 紅^ニ会^ハ莫^ク花^ニ若^ク 紅会 花に若くはなし 御
- 18 白^ニ間^ニ任^ル葉^ヲ翻^ル 白間 葉の翻るに任す 良
- 19 長^ノ廊^ノ僧^ハ步^ク月^ニ 長廊 僧は月に歩す 節
- 20 奇^ノ夜^ノ客^ハ敲^ク門^ヲ 奇夜 客は門を敲く 雲

(5) 『世説新語』にみえる故事「東床坦腹」。太傅郗鑒が娘婿

を人選するところ、王羲之が腹を露わにして床に横たわ
り動じなかったので、闊達な人物だと見極められた。
(6) 前句の睡眠から蟻の築城に転じたのは「南柯一夢」に基
づく。「有大穴、根洞然明朗、可容一榻、上有積土壤以
為城郭台殿之状、有蟻数千聚其中」（太平広記・昆虫
・淳于棼）。この故事は真第十一76句に既出。

- (7) 蠅が「宛に附く」は「附驥尾而行益顯」（史記・伯夷列
伝）に基づく。宛は宛馬、西域大宛から産出する名馬。
(8) 熟語として五山漢詩に見られ、風雅な集まりか。惟高妙
安「鶯語勸人紅会催、春初小集雅筵開」（春初紅会）な
ど。

(9) 「白閑」とも、窓の意。何晏「皎皎白閑、離離列錢」（文
選・景福殿賦）。

- 21 医^ニ国^ヲ人^ノ參^ル馬^ヲ 国を医す 人參の馬 六條宰相
- 22 隠^ル丘^ニ官^ノ藁^ノ鯉^ヲ 丘に隠る 官藁の鯉 潤
- 23 潮^ハ平^ニ桅^ノ欠^ク嘯^ヲ 潮は平にして桅は嘯を欠く 雲
- 24 泥^ハ滑^ニ屐^ノ留^ム痕^ヲ 泥滑らかにして屐は痕を留む 節
- 25 儻^ハ秃^ニ笠^ノ蔵^ス醜^ヲ 儻秃 笠は醜を蔵す 良
- 26 漢^ノ家^ノ香^ハ返^ル魂^ヲ 漢家 香は返魂 洪

27 患^レ多^ク宵^ニ独^リ雨^ニ 多を患ふ 宵独の雨 超

28 罷^ム釣^ヲ坐^シ漁^シ昏^ニ 釣を罷む 坐漁の昏 御

29 沙^ニ雁^ト臥^ス波^ニ塔^ト 沙雁 波に臥す塔 竹

30 寒^ニ鶏^ト報^ス暁^ヲ村^ニ 寒鶏 暁を報ずる村 宰相

(10) 晋の名士謝鯤。『世説新語・品藻』「明帝問謝鯤、君自謂如何庾亮。答曰、端委廟堂、使百僚准則、臣不如亮。一丘一壑、自謂過之」。

(11) 嘯歌、謝鯤が得意とした。蘇軾「捍索桅竿立嘯空、篙師酣寢浪花中」(慈湖夾阻風五首、其一)とみえるが、こゝは波風も無いことをいい、謝鯤が乱を避けて渡江したことを踏まえるか。

(12) 黃庭堅「玉堂端要真學士、須得儋州秃鬢翁」(病起荊江亭即事十首、其七)。蘇軾が晚年海南島の儋州に左遷された。

31 把^シ茅^ヲ移^ス漏^ヲ蜀^ヲ 把茅 漏蜀を移す 節

32 密^ニ竹^ヲ聚^ム淇^ノ園^ニ 密竹 淇園を聚む 御

33 檐^ニ溜^シ瑟^ス至^ル 檐溜 瑟は斯に至る 洪

34 甲^ノ科^ノ材^ヲ以^テ論^ス 甲科 材は以て論ず 竹

35 輕^シ鵬^ヲ堯^ノ戮^ニ善^ニ 鵬を軽くして堯は善を戮にす 御

36 吐^テ蚌^ヲ杲^ノ声^ヲ兔^ヲ 蚌を吐きて杲は兔を声す 洪

37 蹈^ニ鉄^ヲ蒺^ヲ玄^ノ路^ニ 鉄蒺を蹈むは玄路 雲

38 拄^ニ金^ノ笏^ヲ紫^ノ垣^ニ 金笏を拄ふるは紫垣 節

39 官^ノ途^ニ臨^ム深^ニ履^ニ 官途 深きに臨む履 圭

40 溽^ニ暑^ヲ納^ル涼^ヲ軒^ニ 溽暑 涼を納るゝ軒 潤

(13) 杜甫「茅屋為秋風所破歌」を踏まえるか。「公然抱茅入竹去、唇焦口燥呼不得」。策彦周良「黃巢所過雖殘滅、漏蜀猶存老杜茅」(翰林五鳳集卷二十九)。

(14) 淇園は竹を産出する。『史記・河渠書』「是時東郡燒草、以故薪柴少、而下淇園之竹以為榿」。黃庭堅「移竹淇園下、買花落水陽」(次韻文潛同遊王舎人園)。

(15) 不詳、人名か、後考を待つ。

(16) 蒺藜子の形をした鉄器、道に撒かれ敵の進行を阻害する。玄路は玄輅、黒い車。

41 瀑^ヲ洗^フ定^ル龍^ヲ眼^ヲ 瀑は龍を定むる眼を洗ふ 良

42 虚^ハ厖^ニ化^シ蝶^ト言^フ 虚は蝶と化する言を厖にす 竹

43 靄^ハ、聴^ス、瑩^ス、絶^シ、景^ヲ

靄は絶景を聴瑩す

御

52 醉^シ、面^ニ、共^ニ、傾^ク、樽^ヲ

酔面 共に樽を傾く

節

44 鬢^ハ、逆^ス、倒^シ、詞^ノ、源^ヲ

鬢は詞源を逆倒す

雲

53 学^ニ、幕^ス、天^ニ、伶^ヲ、霧^ヲ

天に幕はるは伶を学する霧

御

45 琴^ハ、冷^シ、靈^ノ、泉^ノ、亮^シ

琴は冷し 靈泉の亮

超

54 駐^ル、盤^ニ、田^ノ、啓^ス、原^ヲ

田を盤しむ啓を駐るは原

雲

46 棉^ハ、伝^フ、少^ノ、室^ノ、賁^シ

棉は伝ふ 少室の賁

澗

55 鶯^ノ、妃^ノ、眉^ハ、八^ノ、字^ヲ

鶯妃 眉は八字

節

47 争^テ、雄^ヲ、詩^ニ、有^リ、虎^ヲ

雄を争ひて詩に虎有り

宰相

56 蚕^ノ、蠶^ノ、手^ハ、三^ツ、盆^ヲ

蚕蠶 手は三たび盆す

澗

48 並^レ、影^ヲ、波^ヲ、猶^ホ、鴛^ノ、鴦^ノ、影^ヲ

影を並べて波は猶ほ鴛の影

超

57 纏^ツ、自^レ、情^ヲ、糸^ヲ、乱^ス

自を纏つて情糸乱る

竹

49 恩^ハ、浅^シ、猷^ノ、環^ヲ、献^ス、寿^ヲ

恩は浅し 環を猷する寿

雲

58 勞^シ、吾^ハ、愁^ヲ、譜^ヲ、繙^{トク}

吾を勞せしめて愁譜繙とく

圭

50 瘡^ハ、呼^フ、誅^ヲ、錯^ヲ、爰^ヲ

瘡は呼ぶ 錯を誅する爰

澗

59 空^ノ、閨^ノ、灯^ハ、泣^キ、向^フ

空閨 灯は泣くに向ふ

雲

(17) 蘇軾「学道恨日浅、問禪慙聴瑩」(径山道中次韻答周長官兼贈蘇寺丞)。

(18) 賁は卦の名、「賁於丘園、束帛芟芟」(易賁)。また虎賁の語もある。ただし、少室すなわち嵩山の別峰、祖師達磨が面壁した場所との関わりは不明。

(19) 誅晁錯。『漢書・晁錯伝』「呉為反數十歳矣、髮怒削地、以誅錯為名、其意不在錯也」。

(20) 車を御すること。吟肩は詩人。策彦周良「古木回巖暮雪天、江山佳景上吟肩」(江天暮雪)。

(21) 繭を三度漬すこと。『礼記・祭義』「及良日、夫人纁三盆手、遂布於三宮夫人、世婦之吉者、使纁」。

(22) 蘇軾「今觀此壁画、亦若其詩清且敦」(王維吳道子画)。

51 吟^ノ、肩^ヲ、誰^カ、執^ル、輿^ヲ

吟肩 誰か輿を執る

洪

61 遁^テ、愛^ス、漫^ク、騰^ル、地^ヲ

遁れては漫騰の地を愛す

御

62 賢^ハ窺^フ至^ニ徳^ノ藩^ニ 賢は至徳の藩を窺ふ 竹

63 破^レ窓^ニ間^ニ出^ル孔^ト 破窓 間に出る孔 超

64 乍^レ暖^ム即^チ休^ム孫^ト 乍暖 即ち休する孫 洪

65 知^ル火^ノ煙^ト村^ノ杏^ト 火なることを知る煙村の杏 良

66 采^ル溪^ニ古^ノ廟^ノ藜^ト 溪に采る 古廟の藜 超

67 礼^ト云^フ羊^ノ跪^ク乳^ト 礼と云ふ 羊は乳に跪く 節

68 人^ノ弗^レ毳^ヲ随^フ跟^ト 人弗 毳は跟に随ふ 洪

69 五^ノ百^ノ廬^ノ猶^ホ小^{ナリ} 五百 廬は猶ほ小なり 宰相

70 尺^ノ迦^ト就^シ独^リ尊^シ 尺迦 就は独り尊し 御

(23) 宋代詩詞にみえる「慢騰騰地」か。ただし本来は「ゆつくりと」の意味で、副詞的な用法を示す助字「地」を、ここでは名詞としている。周邦彦「情性児、慢騰騰地、惱得人又醉」(紅窓廻)。

(24) 雪が反射する光を借りて読書する孫康の故事を改めたか。急に暖かくなり、雪が消えたあとは夜の読書をやめた。

(25) 杏花の艶やかな色を火に譬えているか。宋詩には陳襄「洞裏桃花青葉嫩、牆頭杏火綠煙新」(寒食日常州宴春園)など。

(26) 藜は水草の名、『詩経・召南』に「采藜」篇があり、夫人の婦道を守ることを謳う。

(27) 羊が乳をもらう時は前足を跪かせることから、孝と礼を知るとされる。杜甫「鴻雁及羔羊、有礼太古前。行飛与跪乳、知序又知恩」(杜鵑)。

(28) 『景德伝灯録』「淨慧曰、子向後有五百毳徒、而為王侯所重在」。

(29) 「尺迦」は「釈迦」、「就」は「驚」とすべきか。釈迦仏が靈鷲山で『無量寿経』や『法華経』を唱えたという。

71 経^ノ炊^ク滋味^ノ蔗^ト 経炊⁽³⁰⁾ 滋味の蔗 御

72 布^ト且^レ陋^ノ名^ノ攀^ト 布且 陋名の攀 洪

73 恣^ニ耳^ノ目^ノ娯^ヲ水^ニ 耳目の娯を恣するに水 良

74 喻^ル聾^ノ唾^ノ説^ニ嗽^ト 聾唾の説に喩るは嗽 竹

75 南^ノ宗^ノ疑^ト頓^ト教^ヲ 南宗 頓教を疑ふ 澗

76 西^ノ祖^ノ禍^ト仍^レ昆^ト 西祖 仍昆に禍ひす 雲

77 兄^ノ弟^ノ閱^ク牆^ニ筭^ト 兄弟 牆に閱めくは筭 超

78 君^レ臣^レ合^レ道^ニ 君^レ臣^レ 道^ニに合^レふは^ニ 良^ク

79 楚^ハ依^ス均^ニ放^ル 楚^ハ均^ニ放^ルたるるに^レ 咀^フに^レ依^スす 雲

80 夢^ハ被^レ杜^ニ生^ニ吞^マ 夢^ハ杜^ニ生^ニに^レ吞^マる 洪

(30) 楊万里「書生一腹無十困、經炊史酌不曾飢」(寄題邵武張傑運千万卷樓)、琴叔「史酌經炊双鬢雪、都歌里詠一囊詩」(此以下三首、奉寄睡隱主翁)と用例はみえる。

ただし前者は儒教經典、後者は仏典をそれぞれ指す。

(31) 慧能が創立した南宗の門派。慧能「惟伝頓教法、出世破邪宗」(修行頌)。

(32) 昆仍、子孫。黃庭堅「寂寞向千載、風流被仍昆」(次韻楊明叔見餞十首、其四)、また「簡編均骨肉、簪笏到仍昆」(送晁道夫叔侄)。

(33) 『詩經・小雅』「兄弟鬩於牆、外御其務」。

(34) 屈原、字靈均。白居易「蘇懷放靈均、国政亦荒淫」(詠史五首、其一)、蘇軾「靈均去後楚山空、澧陽蘭芷無顏色」(帰朝歎和蘇伯固)。

(35) 杜生は不明、後考を待つ。

81 瀦^ニ不^レ濁^ル胸^ニ海^ニ 瀦^ニ濁^ラらざるは^ニ胸^ニ海^ニ 節

82 仰^テ弥^高骨^ニ崑^ニ 仰^テぎて^レ弥^いよ高^し 骨^ニ崑^ニ 潤

83 簇^ハ霞^ニ峰^ニ失^レ得^ル 簇^ハ霞^ニ 峰^ニは^レ失^レ得^ル 圭

84 孝^ニ室^ニ坐^ス清^ニ温^ニ 孝^ニ室^ニ 坐^スは^レ清^ニ温^ニ 雲

85 荷^ノ館^ニ夏^ニ捐^ル扇^ヲ 荷^ノ館^ニ 夏^ニは^レ扇^ヲを^レ捐^ル 超

86 菊^ノ房^ニ夕^ニ当^ル飡^ヲ 菊^ノ房^ニ 夕^ニは^レ飡^ヲを^レ当^ル 御

87 沸^ル湯^ニ虫^ニ四^ニ匹^ニ 沸^ル湯^ニ 虫^ニ四^ニつ^ニに^レ匹^ニ 洪

88 征^ル轡^ニ馬^ニ東^ニ奔^ル 征^ル轡^ニ 馬^ニ東^ニに^レ奔^ル 竹

89 雲^ハ相^ニ山^ニ頭^ニ帽^ニ 雲^ハ山^ニ頭^ニを^レ相^スする^ニ帽^ニ 雲

90 露^ハ磨^ニ砌^ニ上^ニ璠^ニ 露^ハ砌^ニ上^ニに^レ磨^スする^ニ璠^ニ 節

(36) 蘇軾詩に多い。「光風為花好、奕奕弄清温」(牡丹和韻)、「天香国艶肯相顧、知我酒熟詩清温」(十一月二十六日、松風亭下、梅花盛開、其二、再用前韻)、「余光照我玻璃盆、倒射窓几清且温」(広州何道士衆妙堂)。

(37) 屈原「朝飲木蘭之墮露兮、夕餐秋菊之落英」(離騷)。

(38) 四つにめぐる、四周。元結「水涯四匹、多敬石相連、石上堪人坐」(石魚湖上作)。

91 顔^ガ天^ニ那^ニ暇^ニ惜^ム 顔^ガ天^ニ 那^ニぞ^レ惜^シむに^レ暇^ニあらん 良

92 跖^カ賊^イ 更^ニ憂^レ繁^ヲ 跖^カ賊^イ 更^ニ繁^ヲを憂^フ

御 寒第十四 慶長十六年五月二十九日

93 興^ニ廢^ニ俱^ニ 齊^ニ蔓^ニ 興^ニ廢^ニ 俱^ニ蔓^ニに齊^シ

洪 1 山^ノ滴^リ 緑^カ耶^ノ雨^ニ 山^ノ滴^リ 緑^カか雨^カ

94 死^ニ生^ニ本^ニ 数^ス根^ニ 死^ニ生^ニ 本^ニは根^ニに数^ス

竹 2 樹^ノ陰^ヲ 染^テ不^レ乾^カ 樹^ノ陰^ヲ 染^テめて乾^カず 節

95 暮^ニ齡^ニ 蛾^ト赴^ク 燭^ニ 暮^ニ齡^ニ 蛾^トは燭^ニに赴^ク

澗 3 風^ノ流^ル 蒼^ク又^ク月^ニ 風^ノ流^ル 蒼^クまた月^ニ

96 淑^ニ氣^ニ 鳥^ト吹^ク 埴^ヲ 淑^ニ氣^ニ 鳥^ト埴^ヲを吹^ク

節 4 英^ノ会^ハ興^ハ何^ゾ漫^{ナラン} 英^ノ会^ハ 興^ハ何^ゾ漫^{ナラン}

97 懷^ヒ惠^ニ 民^ト歌^フ 舜^ヲ 惠^ニ懷^ヒて民^トは舜^ヲを歌^フ

超 5 詩^ノ助^ハ景^ハ晴^テ好^シ 詩^ノ助^ハ 景^ハ晴^テれて好^シ

98 出^テ群^ヲ 士^ト慕^フ 樊^ヲ 群^ヲを出^テ士^トは樊^ヲを慕^フ

宰相 6 逸^ニ勤^ニ 窓^ノ雪^ヲ 纂^ム 逸^ニ勤^ニ 窓^ノ雪^ヲ纂^ム

99 皆^ニ戀^ニ 排^テ闔^ヲ 故^ニ 皆^ニ戀^ニ 闔^ヲを排^テする故^ニ

圭 7 世^ハ天^ノ顔^ハ 寿^ハ 跖^ハ 世^ハ天^ノ顔^ハ 寿^ハ 跖^ハ

100 加^シ世^ニ 応^ジ門^ニ 闔^ニ 加^シ世^ニ 門^ニに應^ジる闔^ニ

雲 8 涯^ハ瘦^リ 沈^リ 皤^リ 潘^リ 涯^ハ瘦^リ 沈^リ 皤^リ 潘^リ

(39) 『莊子・雜篇』「盜跖從卒九千人、横行天下、侵暴諸侯」。

東第一49句に既出。

(40) 『詩經・小雅』「伯氏吹埴、仲氏吹篳」。

(41) 樊噲排闥。『史記・樊噲列伝』「高祖嘗病甚（中略）十余日、噲乃排闥直入、大臣隨入」。また『蒙求』にも「樊噲排闥」とある。

(42) 天闔、天帝の門番。『楚辭・遠遊』「命天闔其開闔兮、排闥闔而望予」。

10 德^ノ輝^ハ 舞^ハ 廷^ニ 鸞^ヲ 德^ノ輝^ハ 廷^ニに舞^ハふ鸞^ヲ 廣

(1) 景に即して即興にという意の語「漫興」からか。杜甫に「絶句漫興九首」がある。

(2) 早世した顔回と天寿を全うした盗跖の対照は、元第十三

91と92句に既出。

(3) 南朝梁の沈約が病気で瘦せ、晋の潘岳が若くして白髪が生えること。沈腰潘鬢。白玉蟾「風沈腰何束、霜潘鬢謾蟠」(盱江舟中聯句)、また蘇軾の詞にも「沈郎易瘦、也不須驚怪、潘鬢先愁」(沁園春)とある。

- 11 涼軒移^ハ竹^ヲ瀑 涼軒 竹を移せば瀑 洪
- 12 春^レ夜^ヲ映^ル梨^ニ欄 春夜 梨に映ずる欄 日性
- 13 跋^ス燭^ヲ浮^ニ遊^ノ李 燭を跋までにす 浮遊の李⁽⁴⁾ 重
- 14 著^ル文^ヲ屈強^ノ韓 文を著はす屈強の韓 節
- 15 高^ノ僧^ト卑^ク泰^ニ峯^ト 高僧 泰峯を卑しとす 澗
- 16 四^ノ友^ヲ雜^ニ洮^ノ端^ト 四友 洮端を雜ゆ 雲
- 17 雁^ハ固^ク字^ヲ軍^ノ備^ト 雁は字軍の備ふるを固くす 賢
- 18 鶯^ハ超^テ琴^ヲ客^ノ彈^ニ 鶯は琴客の弾ずるに超ふ 御
- 19 晚^ニ成^ル梅^ハ老^ト 晩成 梅は老を老とす 外
- 20 宮^ノ様^ト柳^ハ官^ト 宮様 柳は官を官とす 竹
- (4) 李白「春夜宴桃李園序」。跋燭は燃え尽きそうな蠟燭、

浮遊は漫然と遊興すること。「古人秉燭夜遊」による。
 (5) よく似た表現として元第十三13句に既出。
 (6) 甘肅の洮河と広東にある端溪、水名であり名硯でもある。

- (7) 「柳は官を官とす」は難解であるが、「官柳」という語が意識されたか。官柳は街路樹として植えられる柳、また官府の柳など、梅との対偶がしばしば見られる。杜甫「市橋官柳細、江路野梅香」(西郊)、策彦周良「野梅官柳其朝渥、四海九州帰一仁」(和希邵少年試筆)など。
- 21 離^レ緒^ヲ常^ニ牽^レ恨^ヲ 離緒 常に恨を牽く 性
- 22 活^レ機^ヲ動^レ受^レ謾^ヲ 活機 動すれば謾を受く⁽⁹⁾ 洪
- 23 何^ノ龍^ヲ興^ル魏^ニ蹬^ト 何の龍ぞ 魏に興る蹬⁽¹⁰⁾ 御
- 24 乘^レ虎^ニ坐^レ台^ニ干^ト 虎に乗す 台に坐する干⁽¹¹⁾ 節
- 25 鐘^ト梵^ヲ睡^ニ勞^ト 鐘梵 睡は補ふに勞す 雲
- 26 紙^ト毫^ヲ伝^テ報^レ安^ヲ 紙毫 伝へて安を報ず 竹
- 27 睫^ト梢^ヲ粉^ハ万^ノ里 睫梢 粉は万里⁽¹²⁾ 節
- 28 胸^ト芥^ヲ翠^ハ層^ト巒 胸芥 翠は層巒⁽¹³⁾ 外

29 恩^レ沢、九雲^一夢 恩沢は九雲夢⁽¹⁾

潤

31 涙^一河争援^レ溺^ラ

涙河 争ひてか溺を援はん

洪

30 聖^レ齡、千^一鬱^一單 聖齡は千鬱⁽²⁾單

賢

32 心^一境屢^レ修^ラ観

心境 屢しば観を修ず

御

(8) 柳枝を手折つて旅立つ人に送るといふ風習による連想。

(9) 欺かれること。楊万里「賢尹如何受吏謾、青天白日万人看」(十山歌呈太守胡平一、其人)、また积居簡「照用同時詫合盤、衲僧開眼受他謾」(示照上人)、「尋常苦口、只要諸人不受謾」(虚堂録)など、禪詩禪語である。

(10) 難解。摩瞪伽仙人のことか。

(11) 魏の劉楨のことか、不明。劉楨字は公干、詩才で曹植と併称される。台は金虎台か。

(12) 高祖劉邦の出身地豊邑「粉榆社」から故郷の意。文第十二52句既出。

(13) 胸中の不満。蘇軾「恨無乖崖老、一洗芥蒂胸」(送路都曹、並引)。

(14) 雲夢は古代の藪沢の名。司馬相如の「上林賦」に「楚有七澤、其一曰雲夢、方九百里、吞若雲夢者八九、其余胸中曾不蕪芥」とみえる。「九雲夢」は前句28の「胸芥」を受けて、「上林賦」を踏まえた展開か。

(15) 鬱單越のこと、須弥山の北にある。そのの人民はみな長寿である。『増一阿含経』「我亦曾従耆年長老辺聞、復有鬱單越、人民熾盛、多貯珍宝、所為自由、無固守者、寿無中天、正寿千歳」(卷八)。

33 タ^一樞復^レ魂^ラ露

竹

34 氷^一華透骨寒^シ

氷華 透骨に寒し

澗

35 忍^レ窮^ラ糊^ス被^レ薄^ニ

窮を忍びて被の薄きに糊す

外

36 歴^テ宦^ラ履^ム梯^ノ難^キ

宦を歴て梯の難きを履む

雲

37 師^ト古^ク唐^ノ騷^ノ杜^ト

古を師とす 唐騷の杜

賢

38 王^{タリ}邦^ニ齊^ハ正^{シキ}桓^ト

邦に王たり 齊の正しき桓

御

39 鳳^ト兮樓^ト尚^ト紫^ト

鳳や樓は紫を尚ぶ

雲

40 蛆^モ亦鼎^ト還^ラ丹^ト

蛆もまた鼎の還丹

節

(16) 仕途の艱難をいう。聯句や和漢聯句にしばしば詠まれる。虞第七56句、文第十二151句既出。

(17) 『論語・微子』「楚狂接輿歌而過孔子曰、鳳兮鳳兮、何徳之衰」。前句38の、改革を行い春秋五霸の筆頭と数えられる斉桓公に付ける。

31 涙^一河争援^レ溺^ラ

32 心^一境屢^レ修^ラ観

33 タ^一樞復^レ魂^ラ露

34 氷^一華透骨寒^シ

35 忍^レ窮^ラ糊^ス被^レ薄^ニ

36 歴^テ宦^ラ履^ム梯^ノ難^キ

37 師^ト古^ク唐^ノ騷^ノ杜^ト

38 王^{タリ}邦^ニ齊^ハ正^{シキ}桓^ト

39 鳳^ト兮樓^ト尚^ト紫^ト

41 松^ハ澗^ハ壑^ハ青^ハ壁^ハ 松は澗壑の青壁⁽¹⁸⁾

御

連想は既出の支第四58句、佳第九68と69句、灰第十32と

42 荷^ハ炎^ハ熱^ハ素^ハ紈^ハ 荷は炎熱の素紈

澗

(20) 曹操は小字が阿瞞、曹瞞。

43 煙^ハ湖^ハ無^ハ面^ハ羽^ハ 煙湖 面の無きは羽

御

51 李^ハ零^テ抛^リ玳^ハ瑠^ハ瑠^ハ 李零れて玳瑠を抛つ

御

44 紺^ハ苑^ハ寄^ル生^ヲ羅^ハ 紺苑 生を寄する羅

外

52 笋^ハ迸^リ出^ス琅^ハ玕^ハ玕^ハ 笋迸りて琅玕を出す

澗

45 郷^ハ思^ハ托^シ鴝^ニ去^ル 郷思 鴝に托し去る

洪

53 訝^ハ過^レ檀^ヲ牛^{カト}蟻^ハ 檀を過ぐる牛かと訝るは蟻

竹

46 晚^ハ望^ハ読^ス悪^ク残^ス 晚望 悪の残すを読す

澗

54 噴^ク為^ル醒^ト鳩^ヲ阮^ハ 醒と為る鳩を噴くは阮

雲

47 繁^ハ枝^ハ灯^ハ吐^ク藥^ヲ 繁枝 灯は藥を吐く

節

55 潜^ハ珍^ハ衡^ハ瘴^ハ杲^ハ 潜珍は衡瘴の杲

澗

48 金^ハ橘^ハ火^ハ非^ス蔓^ニ 金橘 火は蔓に非ず

外

56 示^シ現^ス良^ハ峰^ハ曼^ハ 示現す 良峰の曼

洪

49 楽^ム隠^ヲ手^ハ談^ハ皓^ハ 隠を楽しむ 手談の皓

雲

57 智^ハ海^ハ痴^ハ猶^ハ辱^ム 智海 痴は猶ほ辱む

外

50 捲^ク江^ヲ氣^ハ勢^ハ瞞^ハ 江を捲く 氣勢の瞞

竹

(18) 青い山をいう。蘇軾「覚来满眼是廬山、倚天無數開青壁」(帰朝飲、和蘇伯固)、黄庭堅「北人墮淚南人笑、青壁無梯開杜鵑」(夢李白誦竹枝詞三疊、其二)。

(19) 困基を打つこと。『世説新語』に「王中郎以困基は坐隱、支公以困基為手談」とみえる。ここは橘中で困基を楽しむ仙人(太平広記)をいう。この故事を踏まえた句また

(21) 牛過窓櫺。慧開禪師の『無門関』にみえる公案。

(22) 潜珍は龍、蘇軾「林深伏猛在、岸改潜珍移」(送程之邵

60 二蟹^ハ先^ニ靈^ハ鰻^ニ 二蟹 靈鰻に先つ

澗

59 隻^ハ鴛^ハ希^ニ比^ハ玃^ハ 隻鴛 比玃を希ふ

節

58 深^ハ閨^ハ夢^ハ已^ハ闌^ハ 深閨 夢は已に闌なり

御

簽判赴闕) など。杲は『正法眼藏』を著した南宋高僧の宗杲、衡州と梅州に流され、その地の瘴気に苦しまれた。

(23) 東北部にある山。曼は東方朔、字曼倩。

(24) 浙江省紹興にある鰻井という古井のことか。王潤之「飛鼠殿堂古、靈鰻井穴深」(宝林寺)。

61 護^{スルハ} 菊^ハ塔^ヲ秋^ノ寺^ニ 菊塔を護するは秋寺

雲

(25) 「磨」は達磨、「周孔」は周公と孔子。前句とは孔子が杏壇で弟子に授業する故事(莊子・漁父)によるか。
(26) 『詩経・衛風』の「考盤在澗、碩人之寛」に『毛氏伝』は「考は成す、盤は楽なり」と注す。
(27) 甕は前句の「盤」から連想したものか。料理を盛る盤と酒を容れる甕はよく対偶される。
(28) 顔回。『論語・雍也』「賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷」。前句の「甕」を「甕甕」すなわち漬け物の甕と捉え、質素困窮な生活として、ここで顔回を連想したか。

62 敷^ハ苔^ニ甍^ノ旧^ノ壇^ニ 苔甍を敷くは旧壇

節

71 寸^ノ塵^ノ鷗^ノ尺^ノ退^ニ 寸塵 鷗は尺退

63 磨^ハ形^ニ周^ノ孔^ノ外^ニ 磨は周孔の外に形はる

御

72 六^ノ出^ニ鷺^ノ同^ノ看^ニ 六出 鷺は同看

64 濟^ハ考^ニ禹^ノ湯^ノ盤^ニ 濟は禹湯の盤しみを考す

外

73 流^ノ激^ニ白^ノ虹^ノ乱^ル 流激す 白虹乱る

65 車^モ亦^モ轟^ク雷^ノ甕^ニ 車もまた轟雷の甕

賢

74 臘^ノ残^テ光^ノ景^ノ彈^ク 臘残りて光景弾く

66 鉢^ハ其^ノ空^ノ巷^ノ簞^ニ 鉢は其の空巷の簞

竹

75 鬢^ノ天^ノ雲^ノ衣^ニ我^ニ 鬢天 雲は我に衣す

67 禪^ハ非^ル禪^ニ口^ノ捷^ニ 禪 禪に非らざるは口捷

雲

76 属^ノ国^ノ節^ノ銘^ノ肝^ニ 属国 節は肝に銘ず

68 美^ハ尽^ル美^ノ眉^ノ間^ニ 美 美を尽すは眉間

節

77 妾^カ約^ル鴻^ノ兼^ル燕^ノ 妾が約は鴻と燕と

69 推^レ枕^ヲ近^ク賢^ノ路^ノ 枕を推せば賢路近し

洪

78 士^ハ貧^ル鳶^ノ与^テ拍^ニ 士は貧る 鳶と拍

70 垂^レ糸^ヲ限^ニ釣^ニ灘^ニ 糸を垂して釣灘に限にす

御

賢

79 利門 憐^ニ婢^一膝^ヲ 利門は婢膝を憐れむ 雲

80 臥榻 著^ク他^ニ軒^ヲ 臥榻 他軒を著く 竹

(29) 『老子』「用兵有言、吾不敢為主而為客、不敢進寸而退尺」。

(30) 雪の別称。庾信「雪花開六出、氷珠映九光」(郊行值雪詩)他。この句の作者集雲は「六出迎春猶未乾、金衣只恨有梅寒」(鶯路残雪)と詠む。

(31) 光景は光陰、時間。李白「光景不待人、須臾成髮米」(相逢行)。彈は彈指の略か、時間の速さをいう。

(32) 鴻雁と燕とは飛来する季節が異なるため、恋人との約束がいつもずれ違うことを譬えるか。宋陳著「蘭菊不競芳、鴻燕各有時」(良月二十一日郡庠置酒炉亭旁余出山且取子美何時一樽酒重与細論文分韻賦詩韻不及就成十絶、其二)。宋胡寅「每懷会合未曾款、輒復鴻燕春秋異」(送余澤還義興)など。

(33) 拍はわし。『後漢書・馬援伝』「士生一世、但取衣食裁足(中略)当吾在浪泊、西里間、虜未滅之時、下潦上霧、毒氣重蒸、仰視飛鳶跼跼水中。臥念少遊平生時語、何可得也」。ここは危険を冒しても貪欲に走ることか。

81 躋^ス地^ニ微^シ行^ノ趙^ト 地に躋す 微行の趙⁽³⁴⁾
82 感^ス旻^ヲ 歸^リ計^ヲ 旻を感ず 歸計の翰⁽³⁵⁾ 節

83 魚^ノ經^ノ儒^ノ膾^ノ炙 魚經 儒の膾炙 賢

84 烏^ノ帽^ヲ 孰^カ 旒^ノ冠^ヲ 烏帽 孰か旒冠ぞ 潤

85 綴^ル滿^ハ懷^ノ珠^ヲ 汗 滿懷の珠を綴るは汗 外

86 觸^ル吹^ハ毛^ノ劍^ニ癢 吹毛の劍に触るるは癢⁽³⁶⁾ 御

87 吳^ノ根^ヲ 楓^ノ勗^ヲ 植^ル 吳根 楓植うることを勗む⁽³⁷⁾ 雲

88 乾^ニ竹^ノ根^ヲ 堪^レ攤^ル 乾竹 根は攤ずるに堪へたり⁽³⁸⁾ 洪

89 喻^フ舜^ニ日^ノ当^ル午 舜に喩ふ 日の当午 竹

90 迎^レ坡^ヲ 陸^レ起^ス 潤 坡を迎ふれば陸瀾を起こす⁽³⁹⁾ 潤

(34) 「趙」ほどの人物を指すか不明。行脚を続けた徒詵趙州か。「躋地」は抜き足差し足で歩く、謹み畏れる様子。『詩經・小雅』「謂天盖高、不敢不局、謂地蓋厚、不敢不躋」から「局天躋地」・「局躋」の語が用いられる。

(35) 吳の張翰が秋風を感じて故郷の鱸のなますを思い出し、帰郷した(世説新語・識鑑)。

(36) 劍の鋭いことをいう。杜甫「鋒先衣染血、騎突劍吹毛」(喜聞官軍已臨賊境二十韻)。また黃庭堅「一朝被渝祓、吹毛見癩痕」(次韻感春五首、其三)。

(37) 吳越の地。江淹「吳江泛丘墟、饒桂復多楓」(赤亭渚詩)

など、吳地の楓が多く詠まれる。また『新唐書』に記載される崔信明の句「楓落吳江冷」がよく知られる。惟高妙安「幽齋今似吳江冷、楓未落先蓬鬢」(葦郷秋思)。

(38) 『大智度論』「如皮骨和合故有語聲、或者謂人語。如火燒乾竹林、出大音声、此中無有作者」、『大方便仏報恩經典』に「其兄眠臥、即求二乾竹刺、刺兄兩目奪珠而去」(悪友品第六)など、仏典に見られる。攤根は經典を披くことか。

(39) 坡は斜面であるため、陸地の浪と喩えるか。また劉禹錫「長恨人心不如水、等閑平地起波瀾」(雜曲歌辭、其六)、陸遊「康莊坦坦不整駕、可憐平地生濤瀾」(書感三首、其一)など、突然の異変や事件をいう。

刪第十五 慶長十八年九月廿八日

(40) 須陀洹、仏教修行における四果の最初段階、無漏聖道の果位。蘇軾「摩詰原無病、須洹不入流」(次韻陽行先)。

91 筆^ハ、彈^ニ傾^レ漢^ヲ力^一 筆は漢を傾くる力を彈ず 洪

92 扇^ハ、合^ス挽^レ風^ヲ歛^一 扇は風を挽く歛を合す 御

93 施^ス粉^ヲ紅^レ娘^ノ蝶 粉を施す 紅娘の蝶 雲

94 支^レ床^ヲ黃^ニ面^ノ狻 床を支ふ 黃面の狻 澗

95 戒^ハ、無^ニ繩^ノ自^レ縛 戒は無繩の自縛 節

96 果^ハ、有^ニ漏^ノ須^ノ洹 果は有漏の須洹^ト 性

97 草^ハ、茁^ツ針^ノ鋒^ノ計^ハ 草は茁つ 針鋒の計 賢

1 楓^ハ、擯^ニ川^ノ様^ノ錦^一 楓は川様の錦を擯ぶ^ト

2 猷^ト、觀^ニ御^ノ前^ノ山 猷を觀ず 御前の山 召

3 籠^ハ、裊^ニ海^ノ沈^ノ篆^一 籠は海沈の篆を裊す

4 避^ク邪^ヲ俗^ノ裡^ノ閑 邪を避く 俗裡の閑 節

5 光^{アル}、今^ヲ光^ノ霽^ノ谷 今を光る 光霽の谷 溪

6 雪^{キヨク}、恥^ヲ雪^ノ相^ノ班 恥を雪む 雪相の班 澗

7 妾^カ、閤^ニ易^ハ然^リ地 妾が閤 易れば然りの地 竹

8 禅風試過閑 禅風 試みに過る閑 御

9 装包雲送迎 装包 雲は送迎 雲

10 仁履道辛艱 仁履 道は辛艱 璘

(1) 錦を敷くこと。文第十二45句既出。

(2) 沈香の種類か。陸遊「香似海沈黄似酒、不禁風雪最遲開」(細梅三首、其二)、「枕傍小銅匣、海沈起微煙」(夜雨)など。「農篆」はたなびく煙りを漂わすこと。王世貞「幙被据匡床、薰炉農篆香」(不寐)。

(3) 「易地然」か。宋の李处権「不慚顔魯公、易地則皆然」(翠微堂)、邵雍「易地皆然休計較、不言而信省開陳」(答友人)。

(4) 仁の道を履行すること。曹植「履仁遭禍、無為貴道」(矯志詩)、皎然「蹈善嗟沈冥、履仁傷埋阨」(苕溪草堂自大歷三年夏新宮泊秋及春弥覺境勝因紀其事簡潘丞述湯評事衡四十三韻)。

11 師跡禹湯轍 跡を師とす 禹湯の轍 洪

12 巧言皇李訕 言を巧みにす 皇李の訕 重

13 西吟塵月落 西吟 月の落つるを塵く 節

14 南邁歷城環 南邁 城の環るを歴 召

15 塞雁幾煙水 塞雁 幾くの煙水 通村

16 宿鷗必暮灣 宿鷗 必ず暮灣 竹

17 梅船逋舞棹 梅船 逋は棹を舞す 澗

18 花閣邵停轡 花閣 邵は轡を停む 溪

19 訝釣詩漁釣 詩を釣るかと訝るは漁釣 御

20 辱頒批帝頌 批を頒つことを辱するは帝頌 雲

(5) 南に行くこと。劉克莊「夜半一鉢南邁、明朝只履西帰」(夜説伝灯雜書六言八首)。

(6) 熟語として用例が殆どなく、林逋「頂笠衝殘葉、腰裝歇暮灣」(和朱仲送然社師無為還歷陽)がある。

(7) 林逋が梅を愛し鶴を飼い、舟に乗って西湖を遊ぶ。客が尋ねてくると童子が鶴を放ち、それを見て林逋が帰るといふ。宋の姚勉「只怕客來童子放鶴、又催花里棹帰船」(再題小西湖)。

(8) 宋の邵雍が外出の際は小車に乗る。司馬光「林間高閣望已久、花外小車猶未來」(邵堯夫許來石閣久待不至)。

21 蛩然寒食野 蛩は寒食の野に然ゆ 璘

22 牛^ハ没^ニ市塵^ノ闌^ニ 牛は市塵の闌に没す 洪

23 迷^レ悟^ル滯^リ知^ル見^ル 迷悟 滯の知見 重

24 泊^レ漂^ル張^リ往^リ還^ル 泊漂 張の往還 節

25 書^レ空^ニ峰^ノ筆^ノ筆^ノ 空に書して峰は筆筆 召

26 亭^レ午^ニ日^ノ竿^ノ竿^ノ 午に亭りて日は竿竿 御

27 目^レ擊^ト雖^モ年^百 目擊 年百と雖も 溪

28 喉^レ論^ニ藏^ニ壁^ノ間^ニ 喉論 壁間に藏す 澗

29 世^ノ家^ノ民^ノ社^ノ燕^ノ 家を世にす 民社の燕 雲

30 凍^ラ雨^ヲ士^ノ巖^ノ鷗^ノ 雨を凍らす 士巖の鷗 澗

(9) 禅宗滯仰宗のこと。前句の牛を臨済宗廓庵禅師が作った『十牛図』と見て連想したか。

(10) 張翰が故郷を思い、辞任して漂泊をやめた『世説新語・識鑑』にみえる。寒第十四82句に既出。

(11) 東晋殷浩が罷黜されても自失の色を見せず、ただ手で空中に「咄咄怪事」と書いた。文第十二65句に既出。ここは空に聳える峰峰が筆鋒にみえることか。

(12) 孔子旧宅の壁に儒教經典が隠され、秦の焚書から免れて後世に伝わった故事。微第五82句に既出。喉論は人の言説か、用例は未見。

31 飲^レ徳^ヲ洗^ヒ心^ヲ菓^ヲ 徳を飲めば心を洗ふ菓 御

32 嘆^ス衰^{タルヲ}掩^フ鬢^ヲ菅^ヲ 衰へたるを嘆ず 鬢を掩ふ菅 節

33 郷^ノ談^ノ窓^ノ既^ニ白^ク 郷談 窓は既に白く 洪

34 早^レ苦^レ暑^ノ猶^ホ殷^シ 早苦 暑は猶ほ殷し 竹

35 恨^ハ万^ノ千^ノ声^ノ杜^ノ 恨みは万 千声の杜 璘

36 虚^ニ無^ク右^ノ角^ノ蛮^ノ 虚無 右角の蛮 澗

37 争^ノ端^ノ某^ノ鬪^レ智^ヲ 争の端 某は智を鬪はしむ 節

38 物^ノ始^ノ字^ノ遺^ス患^ヲ 物の始 字は患を遺す 溪

39 葉^ハ為^シ写^シ情^ヲ貴^シ 葉は情を写すが為に貴し 召

40 桂^ハ依^テ射^ル策^ヲ攀^フ 桂は策を射るに依りて攀ぶ 節

(13) 徳の恩沢に浴すること。銭起「飲徳心皆醉、披雲興転清」(陪郭常侍令公東亭宴集)。

(14) 『莊子・陽明』「有国於蝸之左角者、曰蝸氏。有国於蝸之右角者、曰蛮氏。時相与争地而戰、伏尸数万、逐北、旬有五日而後反」。

(15) 御溝葉という故事。齊第八32句、灰第十20句に既出。

(16) 射策は漢代の官吏登用試験。攀桂は科擧及第すること。梅堯臣「箭頭破賊棄不為、筆端射策取桂枝」(送周直孺秘校和州都曹)。

41 電^ハ飛^ル 崑^ノ片^ト玉 電は飛ぶ 崑の片玉 竹

42 霞^ハ酌^ム 汗^ノ三^ノ鏢 霞は酌む 汗の三鏢 御

43 山^ハ素^ニ相^シ親^シ 善^シ 山は素より相親しみ善し 重

44 林^ハ繁^シ 而^{シテ} 手^ヲ 刪^ル 林は繁して手から刪る 雲

45 禦^ル 樵^ノ 車^ヲ 隧^ニ 霧^ヲ 樵車の隧を禦くは霧 璘

46 仰^テ 禁^ノ 闕^ノ 天^ヲ 寰^ヲ 禁闕の天を仰ぐは寰 洪

47 獲^レ 讞^シ 周^ノ 何^ノ 咎^ヲ 讞を獲て周何の咎あらん 御

48 不^レ 才^ト 馮^モ 亦^モ 頑^{ナリ} 不才 馮もまた頑たり 竹

49 蹄^ハ 洿^シ 慚^ム 学^ノ 浅^ク 蹄洿 学の浅きを慚ぶ 節

50 美^ト 景^ヲ 富^リ 吾^ノ 憫^ム 美景 吾憫に富めり 御

(17) 『晋書・郗詵伝』「武帝於東堂会送、問郗詵曰、卿自以為何如。詵対曰、臣幸賢良对策、為天下第一、猶桂林之一枝、崑山之片玉」。

(18) 薪を運ぶ車。劉禹錫「唯見里門通德榜、殘陽寂寞出樵車」(傷愚溪三首、其二)。前句で詠まれた、切り落とされた枝を運ぶものか。

(19) 孟嘗君の食客馮諼か。始めのうちは特に才能もなく、食事に魚を、出かける際には車を、老母の扶養などさまざまな要望をせがんだ。『戦国策・齊人有馮諼者』や『史記・孟嘗君列伝』にみえる。

(20) 牛の蹄に溜まる雨水。『淮南子』「夫牛蹄之洿、不生鱷鮪」。ここでは学問の浅いことを喩える。真第十83句に既出。

51 並^ル 四^ノ 者^ヲ 唯^ニ 教^ス 四の者を並ぶるは唯だ教 澗

52 遮^ル 十^ノ 重^ヲ 是^レ 慳^{ナリ} 十重を遮するは是れ慳 雲

53 曉^ニ 蔽^シ 難^シ 続^シ 夢^ヲ 曉蔽 夢を続け難し 御

54 雲^ノ 液^ヲ 好^シ 摛^レ 姦^ヲ 雲液 姦を摛にするに好し 璘

55 現^ル 太^ノ 白^ノ 星^ヲ 菊^ヲ 太白星を現するは菊 雲

56 憂^ル皆濁^ル世^ヲ蘭^ニ 皆濁れる世を憂ふるは蘭 澗

57 時^ニ曹賢^ト逆^レ曳^ル 時曹 賢は逆さまに曳く 節

58 旅^ニ客^ト涙^シ空^ニ潛^リ 旅客 涙は空しく潜たり 洪

59 逝^テ又^レ止^ル遊^ハ杖 逝きてまた止まるは遊杖 溪

60 説^テ尤^モ妙^{ナル}勝^ハ鬢 説きて尤も妙なるは勝鬢 竹

(21) 四種の美事が揃い難いこと。謝靈運「良辰、美景、賞心、樂事、四者難並」(擬魏太子鄴中集詩序)。

(22) 仏教の戒律、四十八軽に対して並び称される。蘇軾「関右土酥黄似酒、揚州雲液却如酥」(泗州除夜雪中黄師是送酥酒二首、其二)。

(23) 雲液は雲母、また雨や露をいう。蘇軾「関右土酥黄似酒、揚州雲液却如酥」(泗州除夜雪中黄師是送酥酒二首、其二)。

(24) 前句に続き、屈原を詠む。『史記・屈原賈生列伝』に「賢聖逆曳兮、方正倒植」。

(25) 勝鬢夫人が説いた『勝鬘経』。

61 竺^ハ從^ニ鐘^ヲ暢^テ近^シ 竺は鐘の暢りてより近し 召

62 漕^ハ自^ニ篔^ヲ融^シ漚^リ 漕は篔の融してより漚たり 溪

63 似^ハ似^ハ任^ハ梨^ニ鷺^ニ 似たることは似たる 梨に任ずる鷺 洪

64 輝^ル輝^ル出^ル草^ヲ軒^ニ 輝輝 草を出る軒 澗

65 経^ニ炊^シ儒^ハ炙^レ口^ニ 経炊 儒は口に炙す 節

66 糸^ハ惑^ル老^テ梳^ル鬢^ヲ 糸惑 老いて鬢を梳る 雲

67 臥^リ独^リ輕^シ佗^ノ術^ヲ 臥独り佗が術を軽んず 竹

68 交^ハ疎^ニ齊^ニ阮^ノ販^ニ 交はり疎にして阮が販に齊し 御

69 柳^ハ青^ク楊^ノ八^ノ佞 柳は青楊の八佞 璘

70 竹^ハ練^若平安 竹は練若の平安 召

(26) 毎日の炊事が欠かせないと同じように、経書を耽読する。元第十三71句に既出。

(27) 不明、後考を待つ。

(28) 青楊巷のこと、南斉蕭子琳の邸宅がある。『南斉書・始興簡王鑑伝』「上為南康王子琳起青楊巷第新成、車駕与後宮幸第楽飲」。韓翃「春衣晚入青楊巷、細馬初過皂萊橋」(送丹陽劉太真)。また「八佞」は宫廷の歌舞。

(29) 仏語、阿蘭若、修行に適する静寂な場所、また仏寺を指す。

71 法^ハ席^ニ鼓^ヲ忠^ク告^ス 法席 鼓は忠しく告ぐ 重

72 広一寒弓曲一彎レリ 広寒（30） 弓は曲がりて彎れり

節

73 潜一悲一秋一後一蜚 潜るに悲しむ 秋後の蜚

雲

74 馳一志一樞一閭一莎 志を馳す 樞閭の莎

竹

75 買一沃一栖一心一遁 沃を買ふ 心を栖しむる遁

雲

76 怨一吳一施一巧一般 呉を怨す 巧を施ふる般

御

77 刀一梯一誰一進一歩 刀梯 誰か歩を進めん

洪

78 文一陣一士一堅一圜 文陣 士は圜を堅くす

雲

79 義一膽一鉄一如一意 義膽 鉄如意

召

80 阿一兄一窟一破一顔 阿兄 窟は破顔

洪

(30) 広寒宮、ここでは月をいい、彎曲した弓のようだという。陸龜蒙「安得彎弓似明月、快箭松下西飛鵬」（早秋 呉体寄襄美）。

(31) 樞は馬に飼料を与えるおけ、樞閭に居るとは走ることなく、飼われるのに甘んじること。釈徳洪「譬如伏樞馬、心不忘馳逐」（送礼禪婦臨川）。また魏武曹操の「老驥伏櫪、志在千里。烈士暮年、壯心不已」（步出夏門行）が著名。

(32) 晋の支遁が鶴を放ち馬を飼う場所として沃洲の山を買うという故事、隱遁の志をいう。絶海中津「東林香火沃洲鶴、逸軌高風誰敢攀」（山居十五首次禪月韻）。

(33) 「巧を施ふ匠」とは、『文選・洞簫賦』「般匠施巧、夔襄准法」でいう公輸班のこと。呉の人に父を殺害されたことを怨むという。唐代筆記小説集「朝野僉載」に「魯般者、肅州敦煌人（中略）怨呉人殺其父、於肅州城南作一木仙人、举手指東南、呉地大旱三年」と記す。

(34) 公輸般が攻撃用の梯を作ったという。『淮南子・修務訓』「公輸、天下之巧士、作雲梯之機、設以攻宋、曷為弗取」。

81 苔一衣一寧一表一信 苔衣 寧ろ信を表せんや

節

82 蔬一食一每一扶一屨 蔬食 毎に屨を扶く

澗

83 齒一追一兒一犬 齒を切ひしばりて兒を追ふ犬

重

84 振一威一睨一父一虧 威を振るひて父を睨む虧

御

85 孝一門一尊一入一謁 孝門 謁に入ることを尊ぶ

溪

86 化一國一喜一帰一完 化国 完に帰することを喜ぶ

雲

87 産一異一靈一芝一土 産は異なり 靈芝の土

竹

88 香一奇一芍一藥一欄 香は奇なり 芍薬の欄

澗

89 輦^レ来^ル秦^ニ 又^レ蝶^ニ 輦にし来る秦また蝶

90 蒲^ニ坐^ス 宋^ノ之^レ糴^ス 蒲坐 宋^ノ之^レ糴

(35) 不明、後考に待つ。

91 懶^シ聽^ス 哀^ニ松^ノ 梵^ニ 聴くに懶し 哀松^ノの梵

92 絶^レ瑕^ヲ 垂^テ棘^ノ 璠^ニ 瑕を絶やす垂棘の璠

93 若^シ亡^カ朝^ニ在^ル 露^ニ 亡が若し 朝に在る露

94 護^ス戒^ヲ 律^ノ宗^ノ 壇^ニ 戒を護す 律宗の壇

95 狎^シ澁^シ魚^ノ 抛^テ尺^ヲ 魚は尺を抛つ

96 依^テ携^テ 鳩^ノ衣^ヲ 斑^ヲ 依携 鳩は斑を衣る

節

洪

璠

雲

溪

澗

召

御

97 靄^ニ横^テ 樓^ノ望^ヲ 塞^ル 靄横たはりて樓望は塞がる 洪

98 更^ニ深^テ 漏^テ 筹^ヲ 闌^{ナリ} 更深まりて漏筹は闌なり 節

99 謳^テ 舜^ヲ 頌^フ 寧^ニ 寝^ム 寝^ム 舜を謳ひて頌は寧る寝まんや 御

100 道^ニ 堯^ヲ 民^ニ 勿^シ 蠲^ス 堯を道て民蠲勿し 竹

(36) 松濤が梵音を帯びること。王維「軟草承趺坐、長松響梵声」(登辨覺寺)。

(37) 春秋時代晋の地名、美玉を産す。また美玉をいう。元稹「白珩無顔色、垂棘有瑕累」(出門行)。

(38) 不明、後考に待つ。明・張天賦「澁澁魚抛尺、交交鳥弄機」(王柳塘池亭排律)。

(39) 鷓鴣の鳴き声が郷思を催すものとして詠まれるが、ここは鷓鴣の姿を見る。齊己「客思莫牽胡蝶夢、郷心自憶鷓鴣声」(洛宮春日因懷有作)。

(よう) こんほう・武蔵野大学准教授)